

新しい学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、古典の取扱いが具体的に示されました。それによって、現在の「読むこと」の領域における指導だけでなく、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の中でも古典を扱った指導が可能になりました。

また、小学校低学年から古典学習が取り入れられることになったため、中学校では指導にいつもの工夫が求められることになります。

本特集では、こうした改訂を踏まえて、学習指導要領の作成協力者である田中洋一先生に、中学校におけるこれからの古典指導のあり方をお話しいたします。

実践提案では、生徒の興味・関心を高める古典指導の実際を2例紹介します。

これからの古典指導

生徒の興味・関心を高めるヒント

インタビュー 田中洋一先生 (東京女子体育大学教授)

新しい学習指導要領における古典

古典の位置づけは どう変わるか

―まず、再確認の意味で、現行の学習指導要領における古典の取扱いについておうかがいします。

田中 現行の学習指導要領の指導事項には「古典」という言葉は出ていません。「計画の作成と内容の取扱い」の中で、「読むこと」に関する指導の留意事項として触れられているだけです。ですから、古典の指導とは「読むこと」の領域に限られていました。

ところが、「読むこと」の指導事項は、ほとんど現代文を想定して書かれており、古典の授業では、それを当てはめて指導していたわけです。

―新しい学習指導要領では、古典に関して

どのような改訂がされたのでしょうか。

田中 今回の改訂では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されました。その中で、古典の指導を中心とした「A 伝統的な言語文化に関する事項」が設けられて、教える内容がはっきりしたのです。

現行では「読むこと」の中で指導してくださいということだったのが、今回の改訂では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域を通して指導するのだということが明記されたのが大きな違いです。今まで表には出ていなかった古典を、各領域で扱うことが可能になったわけです。

また、特定の事項をまとめて指導したり、繰り返し指導したりすることが必要な場合には、特にそれだけを取り上げて指導してもよいことになっています。

―具体的にはどんな指導が可能になったのでしょうか。

田中 これまでは古典の内容を理解するだけで終わっていたのが、「話すこと・聞くこと」の領域でやれるということになれば、たとえば劇化をするなど、表現としての音読・朗読活動もできます。(「実践提案1」P.10)

第三学年「書くこと」の言語活動例に、「A 関心のある事柄について批評する文章を書くこと」がありますが、たとえば徒然草や枕草子の中に表れている人間のものの見方・考え方を批評の対象とすることができます。さらに、作品の一部を引用して批評文を書くというような活動が可能になるのです。三年生の教科書教材「夏草」で、芭蕉にとつて旅とはどんな意味があったのかを考えさせたり、芭蕉の人生観を批評する文章を書かせたりするという活動もおもしろいですね。

また、第一学年「書くこと」の言語活動例にある「ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと」では、「芸術的な作品」として古典を選び、鑑賞文を書くという活動も考えられます。古典の随筆と現代のエッセイを比べて、季節感とか、人間のものの考え方だとかを比べてみるような文章を書かせるのもいいですね。〔実践提案2〕P.12〕

ですから、小学校の学習指導要領をしっかりと把握して、中学校でさらに独自の展開を考えていかなければなりません。小学校で既に学習してきているということの長所と短所をしっかりと見極めることが大切ですね。

小・中学校の連携

田中 今まで生徒たちには、中学校で初めて古典に出会う喜びがありました。新たにスタートする難しさもあるけれども、興味・関心や好奇心があるので比較的指導がしやすかった。ところが、これからはそういう新鮮な出会いは期待しにくくなるでしょう。まず中学校の先生方は、それをいちばん意識しなければなりません。

小・中学校でも「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が盛り込まれ、系統的に古典に触れることになりました。

今まで以上に、教材と生徒たちとの出会わせ方を考えていく必要があります。これまでは「読むこと」での指導だったので、どうしても内容理解に重きが置かれていたわけですが、これからは劇化、朗読などの

田中 現行の小学校学習指導要領では、高学年で文語調の文章に触れることを求めているだけです。ところが今回の改訂で、低学年から古典の指導に関する事項が入りました。子どもたちは量的にも、質的にも、かなり文語の文章に親しんでくることになります。

田中 今まで生徒たちには、中学校で初めて古典に出会う喜びがありました。新たにスタートする難しさもあるけれども、興味・関心や好奇心があるので比較的指導がしやすかった。ところが、これからはそういう新鮮な出会いは期待しにくくなるでしょう。まず中学校の先生方は、それをいちばん意識しなければなりません。

表現活動や、随筆を書くときの材料にするなど、多様な出会わせ方を考えていかなければなりません。

中学校では小学校での既習事項をよく理解して、それをベースにして発展させるようなやり方が必要になってきます。今までのおりのやり方では、生徒の興味・関心を高めることが難しくなってくることを意識してほしいですね。

テレビドラマを楽しむように作品を味わわせたい

これからの古典指導

—今までとはずいぶん違った指導になりそうですが、どういうところを工夫していけばいいのでしょうか。

田中 あまり難しく考えないでいいのではないかとも思います。新しい学習指導要領においても、中学校では「古典に親しむ」ということを主目的にしていることは従来どおりです。

教材の隅から隅まで理解させようと思わなくてもいいんです。現代文の指導でもいえることですが、特に中学校の古典学習は親しむことが目的であり、詳細に読解するのはありません。大体の筋がわかればいいのです。登場人物の生き方とか、心情とかを大きくとらえればいいのであって、一語一語をちゃんと訳していく必要はない。それこそ、テレビドラマを楽しむように作

品を味わわせればいいんです。そういうふうに考えればとても気楽に指導に入れるのではないのでしょうか。

「この作品では、ここだけは押さえてほしい」という焦点化をしておけば、後はゆったりした授業をすればいいんですよ。みんなで感想・知識の交流をするなど、サラシ的な意識で古典の授業に臨むのもいいのではないかと思っています。その中で、作品のあらすじや登場人物の生き方・考え方のおもしろさをとらえ、教師自身が感動したことなどを生徒と共有してもらいたいですね。

あれもこれもと、いろいろな目標を盛り込んだり、教えたことを生徒が百パーセント覚えてくれることを期待したりする古典の指導はうまくいきません。繰り返しになります。学習指導要領に立ち戻れば、「古典に親しむ」というところが目的なのです。

田中 「文語のきまりや訓読の仕方を知り「二年（ア）」という文言がありますから誤解されやすいのですが、これは決して文語文法を学ぶという意味ではありません。これらは歴史的仮名遣いの読み方を知ることや、漢文では返り点など、訓読するための基本的なルールを学ぶことが主で、音読・朗読をスムーズに行うための知識と考える。ただで結構です。あくまでも主眼は、古典のリズムを味わうところにあります。

生徒の生活の中には、ことわざをはじめ文語文がたくさんあふれています。小学校六年生の音楽の共通教材「われは海の子」では、日本中の子どもたちが必ず「煙たなびく苦屋こそ、我がなつかしき住家なれ」と歌っているのです。知識として係り結びを教わらなくても、「なんとなく力強く言っている感じがする」と子どもたちが言うそうです。それこそが日本人としての言語感



田中 洋一

1954年東京都新宿区生まれ。東京女子体育大学教授。都内公立中学校教諭を経て、東京都教育庁指導主事、中央教育審議会国語専門委員など歴任。平成20年告示学習指導要領中学校国語作成協力者。主な著書に『光村ライブラリー-中学校編』（光村図書）、『新学習指導要領詳解ハンドブック』（東洋館出版社）、『国語力を高める言語活動の新展開』（同）などがある。

「古典を長く読ませる」という手法もおもしろい

覚なのではないでしょうか。文語文に親しむというのはまさにそういうことなのです。音読・朗読はそういう感性を育ててくれます。そして、そのために、「文語のきまりや訓読の仕方を知」るのです。

—生徒をひきつける指導のポイントを教えてください。

田中 まず、「話す・聞く」「書く」と絡めながら、生徒自身が自分で考えるところを活動を中心にして授業を組み立てることがいいのではないかと思います。登場人物や作者の生き方について考えるところか、現代の価値観と比べるとかの活動を前面に出していくということ。自分の考えをもつ、自分なりのイメージをもつことなどを大切にしたいですね。

それから、新しい学習指導要領にある「古典にはさまざまな種類の作品があることを知る」「一年（イ）」に注目してください。今までは古典教材といえば物語、随筆、短歌・俳句、漢詩などが中心でした。これ

多面性に触れることで、生徒の古典への親近感が増すのではないのでしょうか。

古典のおもしろさは

—生徒たちにとっての古典の魅力とは、どのようなことなのでしょうか。

田中 古典のおもしろさの一つは、千年も前の人たちが、自分たちと同じようなことを考えていた、同じように悩んでいた、喜んでいたりというのを実感できることにあるのではないのでしょうか。先ほど話した「長く読ませる」方法、または現代の文章と「比べて読む」といった方法をとることで、それがよく感じられるのではないかと思います。先人の息吹に触れて、「ここは違うけれどここは同じだ」などと感じながら、価値観、文化、風俗、習慣など、日本人の伝統的な姿を学んでいくのです。

わたしは、今回の学習指導要領の改訂をきっかけに、古典指導の既成概念を少し取り払ってみたいと提案したいのです。「古典の文章から飛び出せ」と訴えたい。たとえば、源義経はドラマ化されたものがありますよね。それとさっきの「弓流」の人物

からは教材の種類も工夫していく必要があります。たとえば、能、狂言、古典落語、歌舞伎も教材になりうる。ここでは映像メディアがクローズアップされてきますね。また、「国語デジタル教科書」などの提示型ソフトを使うことによって、当時の歴史背景や風俗を視覚的に理解させることもできます。

おもしろい手法の一つとして、教科書に載っている部分の前後を取りあげて、「古典を長く読ませる」という指導があります。内容は大体わかればいい、場合によっては現代語訳で読ませてもいいという姿勢です。その一例として、わたしたちの研究会に所属する先生の実践に次のようなものがあります。

平家物語には、教科書に載っている「扇

古典の文章から飛び出せ

像と比べてみるなど、テレビドラマや映画で描かれた人物と古典に登場する人物を比べてみるのです。

古典という作品の枠の中だけで勝負するのではなく、自分たちの考え方や、現代の

的（那須与一）」の後に「弓流」という段があるんです。激しい合戦の最中に義経が海に弓を落とします。周りの兵はみな「お捨てください」と言いますが、義経は敵の攻撃にさらされながらも必死に拾い上げて帰り、「強い弓なら構わないのだが、このひ弱い弓を敵が取って、これが源氏の大將の弓だと馬鹿にされるのが残念だから命がけでとったのだ」と言ったというエピソードです。

この部分までを読ませるのです。そのことで、「扇的」だけを読んでいたときの義経観が大きく変わってくるのです。

ただ長く読ませるだけ、ストーリーを把握するだけでもいいんです。複数のエピソードを読み重ねることで、生徒の感じ取り方は大きく変わってきます。登場人物の

文章・映像などと組み合わせればとても楽しい授業ができるはずです。そして、古典の魅力を生徒たちにしっかりと伝えていっていただきたいと思います。

新しい学習指導要領における古典指導の体系

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
小学校	(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。	(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のもの見方や感じ方を知ること。
中学校	第1学年 (ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。 (イ) 古典には様々な種類の作品があることを知る	第2学年 (ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。 (イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。	第3学年 (ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。 (イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

